

巻頭特集 1

環境不動産

近年、地球温暖化をはじめとする環境問題による将来の深刻な事態が危惧されている中で、不動産に関しても省エネルギー・長寿命化・質の高い緑化など、環境に配慮した開発や設備導入の動きが見られます。我が国において温室効果ガス(二酸化炭素)排出量の約3分の1は建築関連分野にあるといわれており、また不動産開発が自然生態系などに与える影響度を考えても、このような配慮は極めて重要なものといえます。

私たちは建物を居住や仕事の場所として利用することにより、多くの豊かさを得ていますが、次の世代の人たちもまた、今の世代と同様の豊かさを得られるようにしなければなりません。そのためには、品質を保ちながら、環境への負荷をできるだけ少なくする建物をつくらなければなりません。それを実現できるのが、「環境不動産」だと考えられます。

しかしながら、環境不動産に関しては、通常の不動産よりも費用がかかることだけが強調され、普及が進まない状況にあると思われます。

そこで住友信託銀行は、環境不動産の「付加価値」を投資の観点から正しく評価することを研究し、その普及に向けたさまざまな活動を行うとともに、経済性と両立した環境不動産ビジネスに積極的に取り組んでいます。

(写真)住友信託銀行が環境配慮型建築コンサルティング業務を受託した
クラリオン株式会社 本社事務所・技術センター



環境不動産の「付加価値」を 投資の観点から評価して 普及につなげる

■ インタビュー

「不動産の長期的、継続的な価値を維持、向上させていきたい」

地籍を江戸時代以前にまで遡ることができるように、本来、不動産は長期的、継続的な視点の中で捉えるべきものです。しかしながら、いつからか短期的、投機的視点のみから不動産を捉える思考が地球全体を支配し、大きな混乱を招きました。一方、地球規模では、経済活動の基盤を揺るがすような気候変動が確実に進行しています。「環境不動産」とは、社会・経済・環境面での不確実性が高まっていく中で、長期的、継続的な価値を維持、向上させていく不動産のあり方です。住友信託銀行が「環境不動産」という新たな概念づくりに先鞭をとっておられることに敬意を表します。

東京大学 生産技術研究所 教授 野城 智也 氏



語り尽くせないほどの 「ありがとう」——



■ インタビュー

「大人のファンタジーを創りたいと思いました」

書籍「60歳のラブレター」を読んで「素敵だな」と思ったのが映画化のきっかけでした。人はいくつになっても恋をするのに、日本映画には大人の恋物語が少ないので、大人のファンタジーを創りたいと思いました。3年前に映画化に着手して以来、何度も挫折しそうになりながらも、たくさんの方々のご協力を得て完成させることができました。この映画を観て夫婦というものの良さをあらためて感じてもらえたらと思います。何か機会でもないと、なかなか夫婦がお互いに手紙を書くことはないし、はがき一枚だからこそ伝わるものがあるので、この素敵な企画を今後もぜひ続けていってほしいと思います。

映画「60歳のラブレター」プロデューサー 三木 和史 氏

巻頭特集 2

60歳のラブレター

「60歳のラブレター」は、2000年11月22日（いい夫婦の日）から当社が始めた、夫婦間のラブレターをはがき1枚に綴っていただく応募企画です。この企画は、高度成長期を支えつづけ、セカンドライフという人生の節目を迎えられた方々に、これからもより充実した生活を送っていただきたい、との思いから生まれました。2008年に9回目を迎え、9年間の応募合計は93,626通にもなりました。

「長年連れ添った夫から妻へ、妻から夫へ、なかなか口に出しては言えない互いへの感謝の言葉を一枚のはがきに綴る」というテーマのもとお送りいただいたラブレターからは、ともに歩み、年を重ねたからこそ築かれた夫婦の絆が感じられ、人生の伴侶への深い愛情・感謝の念がにじみ出ています。

なお、ご応募いただいたラブレターは毎年約160編が選出され、NHK出版から刊行されています。これら出版本の印税は、「NHK歳末たすけあい・海外たすけあい」「日本盲導犬協会」に全額寄付しています。

また、2009年5月16日には、この企画に着想を得た映画「60歳のラブレター」が全国公開されました。9万通のラブレターのエッセンスが凝縮され、3組の男女の物語をたくみに交差させた、心に染み入るストーリーとなりました。

「60歳のラブレター」は皆様に支えていただき、感動の輪を広げながら、今年10年目を迎えます。当社はこれからも、心温まるラブレターへの感動を皆様と分かち合っていきたいと思えます。

※ 映画「60歳のラブレター」のDVDが2009年11月22日（いい夫婦の日）に発売されます。ぜひ、心温まるストーリーをご覧ください。



巻頭特集 3

SRI(社会的責任投資)

SRIは、成長性や収益性のみならず、環境問題や社会問題への取り組みも考慮して投資先企業を選ぶもので、より良い社会の実現に貢献する投資の仕組みとして、欧米ではすでに広く普及し、世界のSRI残高は2009年3月末時点で600兆円を超える規模となっています。これに対し、日本ではまだ約4,000億円弱にとどまっており、その普及は過渡期の段階にあります。

当社は、持続可能な社会の発展に貢献する取り組みであるSRIに早くから注目し、信託の機能を活用しながら、その普及に力を入れてきました。2003年7月に日本で初めて企業年金からSRIの運用を受託して以来、これまで業界のリーダーとしてSRI市場を牽引してきました。

具体的には、個人マーケットや確定拠出年金、さらには公的年金にもファンドを提供することで市場の裾野の拡大に努めてきました。また、SRIを推進するNPOなどの支援や、セミナーや研究会での提言、啓発活動にも積極的に取り組んできています。

今後は、これらの活動を継続するとともに、これまで培った調査・運用経験を活かし、中国株SRIファンドの商品化も進めていきます。

また、生物多様性に配慮した企業の株式に投資するSRIの開発にも取り組んでおり、社会の持続可能な成長を後押しする金融商品の新たな可能性を探りつづけています。

(写真) 株式会社日本総合研究所 ESGリサーチセンターとの定例会議



より良い社会の実現に 貢献する投資の仕組み。 金融商品の新たな可能性を 探る——



■ インタビュー

「当社年金では2004年度からSRIファンドに投資しています」

まず、SRIに関しては、「投資家の価値観を投資に反映させ、社会変化を創り出し、より良い明日の社会を形成する」という投資理念に賛同しました。

もちろん、理念に賛同するだけでなく、リターンの中で通常の運用手法に劣らないとの分析結果にも納得した上で、導入しました。住友信託銀行に委託したのは、日本総合研究所と共同で、先駆者として開発に真面目に取り組まれていたからです。

今後お願いしたいのは、決してアンケートを形式主義に陥らせないこと、その時代のテーマ(昨今では安定した雇用機会の確保)に柔軟に着目してほしいことです。立ち上げ当初の熱い思いがある限り、ファンドがより一層進化することを確信します。

九州電力株式会社 経理部 財務計画グループ 部長(年金運用担当) 安達 寛晃 氏

